

グローバルな「中庸（ワサティヤ Wasatiyyah）運動」構想

モハメド・ファウジ・ヤコブ
杉本一郎 訳

※本稿は、2014年7月1日に東洋哲学研究所で行われた講演内容に加筆していただいたものです。〔 〕は訳注です。小見出しの一部は訳者によるものです。

はじめに

2010年の年末、私は東洋哲学研究所で短い講演を行うよう招待を受け、マレーシアにおける複合社会という課題と、それに対する取り組みについて語った。マレーシアの政府、宗教団体、市民社会、すべての宗

教の信徒個々人による様々な取り組みを紹介し、なかく国民統合の方法としての多元主義をマレーシア国民が喜んで受け入れるようになるための挑戦について述べた。〔訳注…講演原文は『The Journal of Oriental Studies』vol. 21 (2011) に掲載。邦訳は『東洋学術研究』第50巻第2号(2011年)に「マレーシアにおける宗教の多元的共存への挑戦」として掲載。ともに東洋哲学研究所ホームページの論文BOXに収録されている〕
本日、私は前回の話を更に進め、ワサティヤ運動、つまり中庸・穏健運動を紹介したい。これはマレーシ

ア政府が先導し、モハマド・ナジブ・アブドゥル・ラザ首相が打ち出している運動であり、国家建設を次のレベルへと高めるとともに、世界の国々を巻き込んで、宗教間の理解と寛容性による世界の平和へと協働していくというものである。

ナジブ首相は、2010年9月27日に開催された第65回国連総会の席で、この中庸運動に関する考えを表明し、好評を博した。首相はスピーチで、過激思想に対抗する武器として中庸運動は大きな潜在力と影響力を有しているとし、ワサティアの思想とその原則・価値観を具体化するための活動とプログラムが企画され、実行されてきていると述べている。

ここではまず、ワサティアの意味について説明するところから始めたい。

ワサティアの定義

ワサティア (wasatiyyah) とはアラビア語であり、つまりクルアーンと預言者の言葉である。イスラム教の教義の主要なふたつの源泉「クルアーン」と「ハディース」

〔預言者ムハンマドの言行録〕に由来するものであるゆえに、ワサティアはクルアーンと預言書に即したものとと言える。アラビア語はクルアーンで使用されている言葉であり、預言者ムハンマド——彼に平安あれ——の言葉なのである。とはいえ、ワサティアはイスラム教に限定されるものではない。そのメッセージと理想は普遍的であり、言語・民族・宗教の違いを超越したものである。

ワサティアという言葉は、一般的に「中庸・穏健」「平衡」「均衡」と訳されている。また「優れた」「卓越した」と翻訳されることもある。その起源はクルアーン（2章143）に出てくる「マタン・ワサタン (umman wa-satin)」に由来する。これは通常、中庸的で中正の国や共同体の意味に解されている。このワサ (wasat) からワサティアという言葉が派生している。

一般的に、イスラム学者はワサティアを中庸とほぼ同義のごとく見なすことに留保をつけている。多くの学者にとって、ワサティアは中庸を超えた意味をもつ。例えばマレーシアの著名なイスラム学者であるモハマ

ド・カマル・ハサンは、ワサティアは概念として、三つの鍵となる含意、つまり「正義」「卓越」「平衡もしくは中庸」を網羅しなければならないとしている。正義という意味を含めるのは、ハディースもしくはスナナ「預言者の慣行録」を基としている。これは、アブサイド・アルクダリ「預言者がメッカからメディナに移住した後、彼を助けたメディナの人々」「アンサールの一人」の認可を得てアマッド(Ahmad)が伝えたことであり、それによれば、ワサティアの語源となったワサト(wasat)を、預言者は正義の意味に解釈したのである。

カマル・ハサンは、正義という言葉は平衡、均衡、中庸といった特性も暗に含んでいるが、そののみならず、そうした特性にふさわしい言葉なのだと論じている。感情や偏見、先入観にとらわれないためには客観的な見方が要求される。そこでカマルは、自身のこの見解を支持するものとして、wasatと同じ語源をもつ awsat-unhum という言葉が使われているクルアーンの章句についての多くの注釈者の意見を用いる。カマルによれば、多くの注釈者がアワサット(awsat)を「[複数

のなかで」最も正しいもの」と解しているのである。

ワサティアの意味の中に「優れた」もしくは「卓越した」をも含めるのは、ハディースもしくはスナナにおける用法と同様に、アラビア語の用法によっている。アラビア語の wasat という言葉は「優れた」もしくは「卓越した」という意味でも理解されているのである。このことは、awsat al-Arab という言葉が、預言者が属しているクルアーンの民を表現したものであり「アラブ人の中で最も素晴らしく、最も高貴である」という意味であることからわかるはずである。また、カマルがここで参照しているスナナでは、預言者はその民のなかで wasat な存在であるとしているが、イスラム学者は、その意味を「彼の属する民の中で最も高貴な系譜をもつ」と解釈している。

カマルは、三つ目の含意である「中庸」の妥当性については問題ないとしている。この含意は広く受け入れられてきたし、wasat という言葉から導き出せる最も明確な意味であるとしている。⁽¹⁾カマルはまた、中庸は「正義などの」他のものを犠牲にしてまで実現しなければ

ばならないものではないと戒めてもいる。「それはクル

アーンとスンナを基準にして決まることである。正義がなければ中庸もないのであり、クルアーンとスンナが明確に禁止していることを犯すならば正義はないからである」と。中庸とは凡庸性ではない。なぜならイスラム教は卓越性を要求しているからである。むしろ、禁じられた2つの極端な立場、つまりイスラム学者が言うところの「過度・やりすぎ (ifrat)」と「放任・だらしなさ (tafti)」の中間に立つということであろう。中庸が正義、卓越、平衡を意味するのは、この点においてである。すなわち、善を為し、イスラム教が命じることを守り、万事において卓越したものを実現するよう努力する。それが中庸なのである。

「過激思想に対抗するための運動」に

国際的支持

ナジブ首相が数々のスピーチのなかで用いてきたワサティヤという言葉は、多くのイスラム学者によって定義され合意されてきた意味で使われている。すなわ

ち、3つの特性を含んだ意味である。「マレーシアという」多元的社会で国民統合を推進する手段として、また国際理解の水準を高めていく手段として、ワサティヤは中庸を強調し、過激な思想を避けるよう強調する。中庸を保つことによって、同時に、卓越性や正義といった理想を実現できるのである。

ナジブ首相の「グローバルな中庸 (ワサティヤ) 運動」(GMM : Global Movement of the Moderates) の訴えは、国連総会演説にとどまらなかった。国連での演説後、他の国際会議でも同様の見解を述べ、同じように高い評価を受けた。そのなかには、イギリス・オックスフォード大学のイスラム研究センター(2011年5月6日)、ベルギー・ブルッセルでのアジア欧州首脳・閣僚会合、シンガポールで開催された第10回アジア安全保障首脳会議(2011年6月3日)、オーストラリア・パースでの英連邦政府閣僚会議(2011年10月30日)、ハワイ・ホノルルの東西センター(2011年11月12日)でのスピーチなどが含まれている。

国際的な支持に励まされ、ナジブ首相は2012年

1月、GMMに関する国際会議を開き、このプロジェクトへの組織的支援を行う機関として「マレーシア・ワサティア研究所（IWM：Institut Wasatiyyah Malaysia）」並びに「グローバル中庸運動財団（GMMF：The Global Movement of Moderates Foundation）」の開設を発表した。IWMは首相府に属して活動し、「あらゆる面での中庸と平衡、そして民主主義、法治、教育、人間の尊厳、社会正義などの尊重」を更に追求していくものである。一方、GMMFは、この努力を国際的なレベルで先導する機関であり、「過激思想に対抗しようという全ての人々に対して、政府機関か非政府機関かを問わず、情報とキャンペーンのための資料を提供し、連帯するための第一の拠り所として活動」する。グローバルな対話と協力に向けての他の取り組みを補完する機関である。

ワサティア（中庸）

——何がそんなに目新しいのか？

GMM国際会議の開会式スピーチで、ナジブ首相は、中庸は特に目新しいものではないと述べた。「これまで

我々は常に中庸の道を選択してきました。1957年に宗主国・英国から、どのように独立を勝ち得たか、そのやり方自体が中庸の証左でありました……。中庸こそ人間の本性にかなう道（fitrah）であり……世界の全ての文明がその上に基礎を置くべき岩盤であります」と。その通りである。実際のところ、中庸は人間本来の道として、イスラム教のみならず他の信仰においても不可欠のものである。預言者ムハンマドは中庸・穏健は全ての行動のなかで最も良きものであると説いているが、このことをイエス・キリストは「あなたがたの寛容を、みんなの人に示しなさい」（『ピリピンへの手紙』4章5節、口語訳）と説き、ユダヤ教の律法は、万事において中庸が「あるべき生き方」であると信徒に教えている。仏教徒は「中道」を歩めと教えられる。道教と儒教においては陰・陽の法則がバランスのとれた生活を指し示している。

ちなみに、ナジブ首相がIWMやGMMFで演説する以前から、その他の地域にもイスラム教の中庸を推進する機関が存在してきた。カタール大学イスラム研

究学部にある「イスラムの中庸と再生のためのアル・カラダウィ・センター」や、ヨルダン王とヨルダン・ロイヤル・アカデミーの支援で設立された「思想と文化のための中庸会議」のふたつが、その例である。⁽²⁾

伝統思想を新しく適用

それでも世界は、GMMの運動が地球という舞台の中心で重要な位置を占めるよう訴えたナジブ首相の演説に目新しさを見出し、多くの指導者やジャーナリストが強い関心と支持を表明した。米・アトランティック誌の特派員であるジェームス・ファローは、国連総会でのナジブ首相のスピーチを以下のように賞賛した。⁽³⁾

「これまでの人たちは、スピーチにおいて、時にシオニストの脅威を強調したり、他の全ての脅威を打ち負かす西洋の覇権主義を論じてきた。しかし、ナジブ首相はこれまでとは異なるアプローチを用いている」。また、キャメロン英国首相は、2013年10月29日、ロンドンで開催された第9回世界イスラム経済フォーラムで、次のように述べた。「……このたび「マレーシア総選挙

で」再選されたナジブ首相は、グローバルな中庸運動を先導する指導者であります。この運動は、過激思想に対抗する世界の人々を団結させ、勇気づけています」。第16回非同盟諸国首脳会議において、GMMの活動は次のように歓迎された。「ここに集った」国家の首脳ならびに政府は、全ての宗教・信条が現代文明に価値的な貢献をしていることを認識し、文明間の対話が寛容と平和的共存という普遍的価値をより深く認識させ理解させるために貢献していることを認識する」〔ここに集った〕国家の首脳ならびに政府は、全ての宗教・信条が平和のためにコミットしていくことを再確認し、より安全で平和な世界の建設へ協働するためには全ての宗教・信条が中庸・穏健を訴えることが必要であることを再確認する。更に、あらゆる形態の過激思想に対抗して、対話と相互尊敬、理解と受容を推進するためには、中庸が重要な価値であり、共通のアプローチとなることを認識する。この意味において、マレーシアがGMMを通じて中庸の推進を先導していることは歓迎されるべき行動である」

GMMが実施している事業の成果は、さらに「国際関係と外交における新しいアプローチ」にも反映されている。ここでは、世界平和と調和を目指す中庸の思想と構想が、その目的のために実地に適用されているのである。政府間外交を補完する民間外交の強化、外交政策の決定に際しての民衆参画の拡大、これらに対するその影響力は新鮮である。

また同様にフレキシブルな取り組みとして、中庸を実践するためのアイデアや構想、戦略を發展させようという5つの分野での努力がある。すなわち「ソーシャル・ネットワークを活用する」「デジタル外交」「従来とは異なる安全保障上の危機」「民主主義とガバナンス」「意思決定・合意形成のシステム」「社会的一体性と、すべての人が恩恵を受ける發展 (inclusive development)」 「青年・女性の市民社会への参加」の5分野である。「民衆の福祉や安全など」イスラム法による基本的目標 (maqasid al-syariah) の達成指数を伸ばしていくのは、まさに骨の折れる作業なのである。

歴代政権の中の「ワサティヤ」

マレーシアでは現在、ワサティヤという言葉は広く使われ、一般的になっている。とはいえ、この概念に近いものは、過去の政権にもあった。トゥンク・アブドゥル・ラーマン〔任期1957～70年〕、アブドゥル・ラザク・フセイン〔70～76年〕、フセイン・オン〔76～81年〕という初代から第3代までの首相による政策の中にも、幾分不明瞭な形ではあるが、友好とかムヒバ〔muhibah／思いやり〕という概念のもとに含まれていたのである。続くマハティール政権〔81～2003年〕では、「イスラム教的価値の鼓吹」という政策において、より明確になった。マハティールの考えでは、中庸は宣布されるべき価値のひとつだったのである。その他の価値としては、信用、責任感、誠実、献身、勤勉、清廉、規律、協力、高潔、感謝が挙げられた。

更に明確に示されたのは、ナジブ首相の前のアブドラ・アマッド・バダウイ〔第5代〕首相が推進した「イスラム・ハダリ (Islam Hadhari／文明的イスラム)」の概念

社会的対立を煽る事件が増加

においてである。彼は、宗教の過激な捉え方に対抗して、中庸もしくはイスラムの文明的なあり方を広めようとしたのである。イスラム・ハダリのメッセージを広めるために、バダウィ首相は「高等イスラム国際研究所 (International Institute of Advanced Islamic Studies)」と、マレーシア国民大学の「イスラム・ハダリ研究所 (The Institute of Islam Hadhar)」を設立した。現在、前者の活動は低調で、公的な支援をあまり受けていない。後者についても顕著な活動を耳にしない。これはプロジェクトの推進者が権力を失うと、設置された機関もおざりにされるということを示しているのであろうか？

おそらくそうではないだろう。なぜなら、当分の間、マレーシアには他に多くの緊急を要する仕事があると思えるからだ。現在の状況から見て、マレーシアは相対的には国内紛争を避け得ている国に入ると言えるだろう。しかし、安閑としてはられない。マレーシアは常に用心しておく必要がある。なぜなら、近年、民族的・宗教的な緊張や不和をかきたてる言論や出来事が以前よりも頻繁に見られるからである。

西暦2000年以降にしばっても、多くの例を挙げることができる。葬儀場での遺体持ち去り、マレー語で書かれたバイブルの没収、マレー人イスラム教徒のキリスト教への大量改宗の申し立て、子どもをどちらの親の宗教に改宗させるかをめぐる親権上の争い、キリスト教出版物ならびに聖書におけるアラアの神という言葉の使用についての争い、ヒンズー寺院の破壊、ある宗教に対する他宗教の信者による不敬行為、宗教的差別の主張、フドゥード法 (Hudud / イスラム刑罰法規。嚴罰を含む) 導入についての論争、牛頭事件 (牛の頭を、ヒンズー教徒を侮辱する目的で投げ捨てるなどした)、LGBT (性的少数者) に関連した諸問題、そのほか多くの問題がある。

おそらく、これらの出来事のいくつかを、よりくわしく見れば、問題のポイントが明らかにになるだろう。まず「葬儀場での遺体持ち去り」事件だが、数年来、何件も起きている。最近では、ペナン島のアパートか

ら落下し2014年6月7日に亡くなったテオ・チェン・チェンのケースがある。家族が彼女の葬儀を準備している間、ペナンのイスラム宗教課の役人達が葬儀場に現れ、彼女はイスラム教徒であるから、イスラム教の埋葬をすべきであり、遺体を差し出すようにと命じた。彼らの主張によると、彼女は1996年にイスラム教に改宗し、ノラ・チェン・ビンティ・アブドラという名前〔ムスリマ名〕ももっていた。遺族は、彼女が仏教徒であると認識しており、改宗のことも知らなかったもので愕然とした。このような場に乗り込むことを好む野党の幹部も加わって、ドラマのヤマ場のようなピリピリした時間が続いたが、結局、家族はしぶしぶ遺体を役人に渡した。野党の指導者にとって、このような事件は宗教課当局の浅慮と無神経を示す都合な事例であった。遺族は、本件を裁判で争うよう助言された。4日後、ペナンのイスラム法高等裁判所は、彼女はイスラム教徒ではないので遺体を遺族に戻すよう命じた。テオ・チェン・チェンは最終的に道教の葬儀で見送られ、バトウ・ガントウン火葬場で火葬された。⁽⁴⁾

子どもがどちらの親の宗教に改宗するかをめぐる親権上の争いに関しては、最近、ふたつの事件があった。そのうちのひとつは、K・パトマナサンと、前妻のM・インディラ・ガンジーによる争いである。パトマナサンはイスラム教に改宗して、モハマド・リズアン・アブドラというムスリム名を得たとしている。2009年4月、彼は2歳、11歳、12歳の3人の子どもを連れ去り、前妻が知らないうちに、イスラム教に改宗させたと言われている。イスラム法裁判所は3人全ての親権を彼に与えた。その後、高等裁判所は前妻に子どもたちの親権を認め、2010年3月、前夫は一番下の女の子を前妻に返すよう命じられた。しかし、彼は何度命じられても応じず、そのため2014年5月30日、イポー高等裁判所は彼に逮捕状を発令した。警察は彼を追跡中とのことであり、この事件はまだ収束していない。⁽⁵⁾

「フドゥード法」すなわちイスラム法に基づく刑法の導入に関する議論は、マレーシア各界にいろいろと懸念を生じさせている。「マレーシアはイスラム教国とい

うわけではないのに、なぜ、この法が必要なのか？」といった疑念である。「この法はイスラム教徒のみに適用されるであろう」と示されたとき、人々の不満はなだめられた。しかし、2014年5月6日、「クアラルンプール近郊の」シャー・アラムで行われた宗教学者のフォーラムで、IWM（マレーシア・ワサティア研究所）のムシャダ博士が「この刑法はイスラム教徒以外にも適用すべきだ」という見解を示した。⁽⁶⁾これに対し、人権団体、公益団体、政治団体、そして個々の市民が一斉に抗議した。これによって刑罰の対象となる者には、個人、与野党の指導者、人権団体、利益団体の指導者も含まれている。社会秩序を脅かす行為や言動によって罪とされるのである。これに対し、民族ごとの人権団体、すなわちマレー系のベルカサ（Perkasa）やイスム（Isma）、華人系のドン・ツォン（Dong Zhong / 董总）、インド系のヒンドラフ（Hindraf）などが、しばしば激しい反対声明を出している。さらには連立与党のメンバーまでもが同様の声明を出すこともある。これは、「反対する国民世論が強いので」彼らの影響力が弱まる危険

を感じて、彼らこそが民衆を守る指導者なのだとアピールするためである。UMNO（統一マレー国民組織）、MCA（マレーシア華人協会）、MIC（マレーシア・インド人会議）、グラカン（Gerakan / マレーシア人民運動党）——これらの政党の指導者たちが、しばしばこのような発言をしている。

こうした事件や行動の頻発に対して、宗教間対話を行っているリーダーらは懸念を示している。彼らはまた、これらの問題に対して当局が何もしないか、あるいは偏った対応しかないことにも不満を表明している。彼らは、こうした現象は芽のうちに摘まねばならないと考えている。

こうしたことから、多くのマレーシア人は、ワサティアの活動をグローバルなレベルで行う前に——イスラエルによるパレスチナへの武力侵略や暴力行為、ミャンマーの「イスラム系少数民族民族」ロヒンギャに対する仏教僧アシン・ウイラトウ率いる迫害活動などに適用する前に——、まずはマレーシア国内という足元で実行すべきであるという意見をもっているのである。

結びに

ワサティア思想は、正確には新しいものではない。国民統合においても、また国際協力・国際理解の推進においても、この思想そのものがとりたてて価値をもっているわけではない。

ナジブ首相は、この思想に対する国際的な関心と支持をもたらした。その先見の明は祝福されるべきであろう。しかし、ワサティア思想がグローバルなレベルで成功するためには、マレーシアという地元で実行され、軌道に乗せなければならない。さもなければ、マレーシアを過激思想に立ち向かう仲間の国と見なしている友好国は、マレーシアの構想を額面通りには受け取らないであろう。そんなことになれば、ワサティア思想にも、そのグローバルな運動にも、弔いの鐘が鳴らされることになるだろう！ もしくは、野党の指導者が批判した通りに、それは「政治的詐欺」と化してしまうだろう。⁽⁷⁾ 実は、ほとんどそうなりかけているのかもしれない。報道によると、(2014年)6月末、ナ

ジブ首相は「自身が総裁を務める政党」UMNOのメンバーに、「イラクの町モスルを奪ったイスラム国の戦士の勇気を見習いたまえ」と呼びかけたそうなのである。⁽⁸⁾

注

- (1) Mohd. Kamal 2013
- (2) Mohammad Haniff Hasan 2014
- (3) *The Atlantic* 2010年9月号
- (4) *The Star Online* 2014年6月15日閲覧
- (5) *The Star Online* 2014年6月15日閲覧
- (6) *Malay Mail Online* 2014年5月7日付。2014年6月6日閲覧
- (7) *Philosophy Politics Economics* 2012年1月26日付。2014年6月2日閲覧
- (8) *The Malaysian Insider* 2014年7月10日閲覧

(Mohamed Fauzi Yaacob /

マラヤ大学人文社会科学部・元学部長)
(訳・すぎもと いちろう／創価大学教授)